

アスピリン使用と大腸癌, 大腸ポリープ

Aspirin use, cancer, and polyps of the large bowel: *Suh O, et al* (Cancer 72: 1171-1177, 1993)

アスピリンおよび他の NSAIDs による抗腫瘍効果が動物研究で報告されている。今回人間に対してアスピリンの抗腫瘍効果を検討した。

対象は 1982～1991 年までのロズウェルパーク癌センターの患者で、この研究では 3 グループに分類した。1 つめは 490 人の結腸癌の患者、2 つめは 340 人の直腸癌の患者、3 グループめは 212 人の大腸ポリープ (68%が結腸, 32%が直腸) の患者である。対照は 2 グループに分類した。1 つめは当センターにスクリーニングで訪れた 1,138 人の健康人である。このグループを“スクリーニング・クリニック・ビジターズ”とする。2 グループめは癌の症状を示唆

するが癌が発見されなかった 524 人の患者である。524 人には消化器疾患がなく 79%に消化器以外の良性疾患がある。このグループを“ホスピタル・コントロール・グループ”とする。アスピリン使用に関しては、以下の 4 グループに分類した。(a) 未使用者, (b) 週 7 回未満 (日 1 回または 0 回), (c) 週 7 回から 13 回 (日 1 回から 2 回), (d) 週 14 回以上 (日 2 回以上)。使用は消化器疾患になる少なくとも 1 年以前から内服している。

アスピリン使用頻度を (a) から (d) まで百分率で各々示すと、結腸癌患者は (a) 48.4%, (b) 41.4%, (c) 7.6%, (d) 2.7%であった。直腸癌患者は (a) 46.2%, (b) 46.8%, (c) 4.7%, (d) 2.4%, ポリープ患者は (a) 40.5%, (b) 43.8%, (c) 9.5%, (d) 6.2%。“スクリーニング・クリニック・ビジターズ”は (a) 32.4%, (b) 56.7%, (c) 7.2%, (d) 3.7%, “ホ

スピタル・コントロール・グループ”は (a) 32.3%, (b) 56.7%, (c) 7.1%, (d) 3.9%である。危険相対比を対数比 (信頼度 95%) で示すと, “スクリーニング・クリニック・ビジターズ”および“ホスピタル・コントロール・グループ”に対する比較では、大腸癌患者は各々 0.33 と 0.44, ポリープ患者は各々 0.28 と 0.43 であり、アスピリン使用者は、未使用者に対して大腸ポリープでは約 70%, 大腸癌では約 60%の抗腫瘍効果がある。

以上の結果よりアスピリンには抗腫瘍効果があると考えられるが、その機序は明確ではない。ただ NSAIDs にプロスタグランディン合成を抑制する効果があり、その結果、細胞分裂を不規則にするからではないかとの仮説がある。

(愛知県がんセンター消化器内科

小野 博美 抄)